

ボールあそびの集い

団体名●丸井ゼミナール／代表者名●長谷目 大和（人間科学部こども学科3年）

はじめに

近年、インターネットや電子機器の普及により、子どもたちの遊びは、オンラインゲームやスマホゲームなど室内遊びが多くなってきている傾向が見られる。それに伴い、運動能力の低下や仲間と一緒に運動する機会が減っている。そこで我々は、発育・発達が著しい時期である子どもたちに、多種多様な「ボール遊び」を通じて、学びや成長を促すと同時に、体を動かすこと、スポーツをすることの楽しさや魅力を味わってもらうため、運動の習慣づくりの一つの方法として、定期的に遊びの場を設ける活動を行なった。

活動内容

本学のハンドボール部の協力を得ながら、週に一回の活動を行なった。その日に行う内容を具体的に学生側があらかじめ決めておくのではなく、その場で子どもたちに何をしたいかを聞き、一緒にその活動を形作っていくことを軸として活動を行なった。準備運動では、その日に行う活動に適した動作を、ボールを使ってもしくはペアで行なった。ドッジボールなどのチーム別や全体で行う遊びから、子どもたちの要望が多ければ鬼ごっこや「だるまさんがころんだ」などボールを使うことにとらわれず、多種多様な運動を通して、新たな発見や学びを作ること意識していた。また、複数人で遊ぶことで周りの人のことを考えながら協調性を感じることができ、楽しさだけでなく、スポーツを通して人としての成長を感じ合えるよう活動を行なった。

成果

最初は、「聞かせ方」が身についておらず、指示がなかなか通らないことが多々あり、子どもと学生、お互いが満足のいく活動をするのが難しかった。しかし、回を重ねながらどうすればより充実した活動にしていけるかを考え、実行していくことで、次第に子どもたちに満足してもらえる時間が増えたように感じた。

複数の学校から、普段は関わりのない子どもたち

と一緒に活動するため、その分団体意識が薄く、統率がとりにくかったものの、その分、子どもたち自身が周りをみて動く姿勢が見られることがあり、運動における能力面だけでなく、人としての成長を見ることができたと感じた。

今後の課題・展望

その場で子どもたちに何をしたいか聞いて活動を行なっているということで、どうしても活動内容に毎回偏りが出てしまうことが多く見受けられたため、ある程度子どもたちからの意見を予測したうえでの工夫を考えたり、子どもの興味を引きやすい準備運動を考えたりする試行錯誤を行なっていきたい。また、この活動の目的の一つでもある運動の習慣化を進めていくためにも、継続的に運動のできる場の提供を行なっていきたい。

